

「紺スタ」というまちあるき

今年で第9回目となる「もりおか中津川まち歩きスタンプラリー」、通称「紺スタ」。今や、まちあるきの定番コンテンツとも言えるスタンプラリーを軸にしつつ、そこに盛り込んだ独自のゲーム性が人気です。運営者、事業者、参加者それぞれが当事者となって楽しむこのイベントの魅力を探るべく、実行委員会を訪ねました。



街を舞台に約1カ月かけて繰り広げられる「紺スタ」。そのリアルゲームを楽しむ参加者は着実に増加中。今年のテーマは植物。ブックには街に植えられた樹木や草木の情報やエピソードが満載です

街と人をつなぐ「紺スタ」とは？

毎年、紺屋町を中心に行われる「もりおか中津川まち歩きスタンプラリー」（以下「紺スタ」）。今年は4月20日（土）から5月19日（日）まで開催されています。65カ所に設置されたスタンプを集め、その個数によって参加賞や特典が得られるなどの企画が用意されています。また、スタンプ設置店での買い物により賞品がもらえるチャンスが増えたり、最後の2日間限定のテーマスタンプやコンプリートスタンプもあり、随所に細かなゲーム要素を備えた企画です。そして、「紺スタ」の特徴と言えるのがオリジナルティあふれるスタンプ。実行委員の一人である銅版画作家・岩淵俊彦さんが一つひとつ制作しています。参加事業者ごとにデザインした消しゴムハンコはファンが多く、「スタンプを押す」こと自体を楽しみに歩く人も多いようです。

から9年前に有志で立ち上げました。第1回目は2日間で19カ所をめぐる企画内容。規模やしくみはバージョンアップしてきましたが、核となる開催意図は変わっていません。イベントの発起人であり、同協議会の会長を務める森理彦さん（ござ九・森九商店代表）に始まりの経緯を伺います。

「紺屋町は皆さんになじみのある通り。しかし、生活環境の変化もあって近隣の市役所や病院の用事を済ませたら車でさっと通り過ぎる人も多かったです。一方で、わんこそばの店や南部鉄器の店など盛岡を代表する品物を扱う店もあり、観光を目的とする方々が歩いている様子も見られました。周辺が『どんと晴れ』のロケ地になったことで、当店でも観光客から色々聞かれる機会も増えていました。この一帯を歩いてめぐると、くみがあれば面白いなと思って矢先、スタンプラリーの話が出て動き出しました。」



広告協賛の場合も、オリジナルスタンプを制作



「花木草景紺スタ」等テーマは森さんのアイデア。主催者側も楽しむことを忘れずに

1カ月間をどう楽しむか

溯れば昭和50年代、河南地区には老舗店で結成した「南部もりおか暖簾の会」という団体がありました。大きな催事や瓦版の発行と共に人気だったのがスタンプラリー。やはり「まちを歩く楽しみを伝えたい」という思いがあり、盛岡の風物や文化をモチーフにしたハンコを使ったようです。その意図を受け継ぎつつ、新たにアップデートした形で「紺スタ」が始まったのです。

第5回目までは別イベントとの連動企画で実施しましたが、第6回目から単独で開催。それに伴って開催期間を長期間にし、スタンプブック（以下ブック）を有料化。毎年テーマを考え、ブック自体の価値を高めるべく読み物として充実を図るなど工夫をしてきました。

昨年は、1冊300円で販売したブック1200冊がほぼ完売。開催期間中に約700人がゴールにやってきたそうです。地元住民は新たな視点で街を知るきっかけになり、転勤者、観光客も幅広く楽しめる同イ

ベントは、盛岡の春を語る風物詩になりつつあります。

運営者、事業者、参加者みんなが「無理せず楽しく持続できる形」を模索しながらじっくり育ってきた「紺スタ」。そこには、目的を共有しながら軌道修正を重ねてきた実行委員会のフットワークと軽やかさがあるようです。

中心となって動く実行委員は6人。対外交渉、ハンコ制作、広報、ツール制作等それぞれの役割を果たしています。小さなエリアを足で行き来し顔の見えるやりとりを重ねてきたことが大きな財産となっています。また、細かなことながらイベント終了後は時間を空けずに反省会を実施。事業者には参加者からの500件近いアンケートをそのままフィードバックします。終了後すぐ参加業者に感想をもらい、反省会や打ち合わせに生かすなど、小まめな取り組みを続けてきました。

「お互いの店舗情報を共有できる参加店も増えていきます。観光パンフに載っていない情報をブックに書いてくれるので、今、その店で何やっているよ、と近所同士が情報を伝え合えるのは嬉しい」と森さんは微笑みます。

参加者自身が完成させる企画

内丸に事務所を構えるアートディレクター・清水真介さん（合同会社

ホームシックデザイン）も実行委員の一人。自身の役割についてこう話します。

「私は、ツール制作や広報の仕事を考えていく役割ですが、実行委員会ではだんだん『街をどう歩いてもいいか』『紺スタ自体が、何を伝えるべきか』を話しあう機会が増えてきました。それを踏まえて、パランスの良いゲーム性を意識したしくみづくりをするようになってきました。」



「紺スタブックはあえて未完成感を残し、ノートの作り込んで楽しむように心がけています」と清水さん

有料化したブックを充実させるために盛り込んだルールや情報。しかし、それがわかりにくいという声もありました。解決に向けて話し合っただけでなく、というシンプルながら手間のかかる過程を丁寧に取り組んできたことで、ようやくイベントスタイルが整ってきたと話します。そして清水さんは来年度、実行委員を抜けることが決まっているそうです。「紺スタ」は、若い人がどんどん関わっていくことで広がるタイプのイベント。より多くの視点加わることによって動き出す何かがあると、清水さんは考えています。



参加事業者は、ほとんどが個人商店。スタンプ制作費等数千円程度で参加可能です。運営費は広告協賛とスタンプブックやバッグ等のグッズ販売収益で賄っています

「紺屋町かいわい街並み協議会」
HP: <https://konsta-morioka.net/>
Facebook: <https://www.facebook.com/konyacho/>
Twitter: @konyacho_kaiwai

「若い感覚が、今後このイベントをどうまとめていくか外側から見た気持ちもあります。創設メンバーが牽引するイベントは推進力も大きいのですが、バトンタッチをスムーズに行うためにも、次に託す目線を常に持ちながら動き、準備しておくこと。それが運営する側として大事な心づもりかもしれないですね。」

「昨今、イベントを誰でも立ち上げられる時代。内部の体力や主催者の生活変化に左右されずに継続していくために引き継ぎは重要なポイントと言えます。」

さて、「紺スタ」は現在も開催中。何軒かめぐってみると、今までは違った街の景色が見えてくるかもしれません。スタンプブックには観光ガイドとは違った視点の情報が満載。終わった後も保管しておけば、観光客の皆さんにデイリーな盛岡情報を教えてあげることができそうです。